

少女の虐待体験詩集絵本に

児童養護施設に来て 一番うれしかったのは 靴下をはかせてもらったこと

家族から虐待されていた少女の体験を基にした詩集絵本「はじめてはいたくつした」(百年書房、540円税込み)が刊行された。児童養護施設に来て一番うれしかったのは、靴下をはかせてもらったこと――。そんな切ない少女の思いを、施設退所者などを支援する「アフターケア相談所 ゆずりは」(国分寺市)所長の高橋亜美さん(44)がつづった。30日には刊行記念トークイベントも予定しており、高橋さんは「こうした子どものことを知る入り口として気軽に読んでほしい」と話す。

著書に出てくる少女と高橋さんとの出会いは、大学4年時に実習で訪れた自立援助ホームだった。少女は父子家庭で育ったが、父は仕事でほとんど家におら

施設退所者など支援する相談所 高橋さん出版



「はじめてはいたくつした」を手にする高橋さん＝台東区で

ず、食事や入浴もままならない毎日。兄や兄の友人から暴力を振るわれた。給食を食べるために傷だらけで学校に通った。小学5年時に保護され、児童養護施設へ。その後、自立援助ホームに移ってきた。当時、少女は16歳。実習で「少女に施設に来てうれしかったことを聞く」という課題が出され、高橋さんは「きっと

お風呂や食事のことかな」と思いながら尋ねた。「まじ、靴下」。少女の即答は意外だった。靴下をはかなくても生きていける。だから買ってとは誰にも言えず、少女ははいたことがなかった。でも、施設のスタッフは、カサカサの少女の足にクリームを塗り、靴下をはかせてくれたのだ。「うれしくて胸がドキド

キした」。高橋さんは、少女の気持ちをこう詩にしたためた。

「靴下をはき、冬は長袖を着る。そんな当たり前だと思っていたことが親や周囲が手を差し伸べてくれるからこそできると気づいた」と振り返る高橋さんは、著書をこんな言葉で締めくくる。「困難な状況にある子どもたちが、家庭には恵まれていなかったとしても『この社会に生まれ、生きられてよかった』と思える社会を作っていきたい」

あす台東で記念 トークイベント

著書の収益は、施設退所者などの進学費用などのための基金に寄付される。トークイベントは30日午後7時、台東区の書店「Roadin Writing」。入場料1000円。申し込み、問い合わせは百年書房(03・6666・9594)。

【篠崎真理子】